

---

# **とある軍才夕の鋼鉄戦記**

猛獸戦車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある軍オタの鋼鉄戦記

### 【Zコード】

Z18830

### 【作者名】

猛獸戦車

### 【あらすじ】

柄にもないことをしたばかりに、あっさりと死んでしまった軍事オタクの大学生、黒川徹平。ところが、神様が行っていたキャンペーンに当選したことで、好きな世界に転生できる権利を得ることに。希望したチートな能力を貰つてゲームである メタルサーバー の世界に転生した徹平の鋼鉄戦記は、果たしてどのようにつづられていいくことになるのだろうか いわゆるチートな主人公最強系、ご都合主義万歳の二次創作小説です。そういうものが苦手な方は読まない方がいいと思われますが、気にせず読んでくれる方は感想

とともに大歓迎します。

## プロローグ

「……………ビートなんだ?」

意識が戻つてたつぱり数十秒考えた挙句に放つた言葉は、まったく情けないほど漠然とした内容だつた。

「家……なわけないよなあ」

俺は本当に途方に暮れていた　なにしろ自分が今立つてゐる空間は、全面真っ白な部屋なのだ。いや、部屋がどうかもわからない。上下左右全でが真っ白で、まるで距離感がつかめないので。

もしも俺を見ている誰かがいるのなら、その誰かは長身で眼鏡をかけていて、ちょっと目つきが鋭い以外は実に普通な顔をした、平均的な日本人男性を見ていることだろう。もつとも今はただでさえ悪い目つきが、困惑のせいでさうに悪くなっているに違いないが。

「落ち着け俺、何があつたかよく考えるんだ」

ぼやぼやの黒髪をさらに手でかき乱しながら、自分に言い聞かせるために、わざと声に出して言つた。陳腐な自己暗示のひとつだが、しないよりはずっとマシだ。

そつ、俺の名前は黒川徹平、私立大学に通つビートでもいる存在で　それがビートして、こんな意味のわからない場所にいるんだ?

「最後に憶えているのは……」

いつものお気楽な休日、俺は早速本屋に行つて楽しみにしていた最新版の陸軍兵器図鑑を購入して、上機嫌で帰路を歩んでいたはずだ。

言い忘れていたが、俺は世間で言われるところの軍事オタク、略して軍オタという生命体らしい。正直オタクという言葉は、差別用語みたいであまり好きではない。男の子が戦車や銃に憧れ、それを熱心に調べる行為を、オタクなどという俗語で呼ばれるのは実に我慢ならない。最初にこの名称を思いついた奴には、是非とも大陸間弾道弾をぶち込んでやりたいものだ。

「いかんいかん、そんなことで怒つている場合ではない。さつさと続きを思い出すんだ俺！」

急いで頭を振つて邪悪な思考を振り払い、再び脳内から記憶を探掘する作業に戻る。

お皿当ての本を手に入れ、ルンルン気分で歩いていく俺だが、ふと道端に落ちている空き缶に気づいた。まったく世の中にはポイ捨てをする不逞の輩が多くていけない。ここは今とても機嫌のいい俺が拾つてちゃんと捨てるやう。

上機嫌の俺は普段ならしないであろう空き缶拾いをしきりに、自分で

「俺、トラックに跳ねられた……？」

猛烈なエンジン音に驚いて顔をあげた俺の視界を占領したのは、自分へと突撃して来る大型トラック ブラックアウト。

「それで起きたらこの有様、というわけか……」これはあの世なのか、はたまた本当の俺は意識不明の重体でここは夢の中なのか

つべづべ意味がわからない。理解できない。自分が生きているのか死んでいるのかすらもわからないだなんて、馬鹿げている。

『よし、我が教えてやろ! お主は死んだのじや!』

「はあ……ー?」

『きなりやたら偉そうな響きを伴った死亡宣告が響いて来て、俺は死ぬほど驚いた。いや、本当に死んでいるとしたら、これは笑えない比喩だ。』

『だから、お主は死んだのじや。邪な物が捨てた空き缶を拾うとしたところを、居眠り運転の大型トラックに……これ以上は残酷過ぎるから控えるが、とにかくお主は死んでしまつたぞ』

そりやまあ、大型トラックにサンドイッチされた状況を具体的に話されても、聞くに堪えないスマッシュタ話になるだけだもんな。

「えつと、今俺に話しかけているのは、ビーチ様で?」

周囲を見渡しても相変わらず真っ白な世界、俺に話しかけて来ている人物の姿は影も形も見えない。といつよりも、なんか直接頭の中に響いて来ているように感じる。

『私はいわゆる神様じゃな。ついでに言つと、ここは天界への一步手前の場所じや』

「あー……うん、俺は天国と地獄、どちらに送られるんでしょうか?  
?」

『おお、ずいぶんと素直な反応じゃなー今までの連中は現実逃避してばかりだったのじゃが……まあよい』

だよなあ、普通はこんなこと言われたならパニック起こすか、現実逃避するかだよな……俺はなんというか、どう考へてもあの状況で助かったとは思えないし、それにこの状況を説明できるわけでもないでの、この神様の言うことを信じるしかないだけなのだが。たぶんある種の開き直りだろ?』

『お主は天国じやな』

やつたーって死んだのに喜べることなのだろうか、これは。

『と言つはずだつたのじゃが、お主はラッキーじゃぞ。今天界でキヤンペーン中でな、なんと善い行いをして死んだ者の中から、抽選で好きな世界に転生させる豪華特典にお主は大当たりしたのじゃ!』

なにそれどういうことなの。

『今言つた通りじゃぞ。早い話がお主は一度目の人生を手に入れたのだな』

「マジですか……!」

最初は実感がわからずただ困惑するばかりだったが、一度目の人生、しかも好きな世界に転生できると聞き、だんだんとテンションが上昇して来た。

『ああ、本当じゅ。神の名に於いて嘘は言わんぞ!』

神様から太鼓判を押されたぞ。どうやら俺の転生フラグは今完全に成立したらしい。

「ところで神様、どうして先程から姿をお見せにならないのでしょうか?」

湧き上がる喜びに圧倒される前に、ふと疑問に思ったことを質問してみた。自分を転生させてくれる大事な神様ということで、口調がやたら丁寧になってしまった。

『ん? ああ、別に大した意味は無い。姿を見せてもよいのじゃが、イメージと違うなどと苦情を言つ輩があつてのう、やめにしたのぢや』

「つづむ、神様のイメージを打ち碎く神様とは、いかよくな姿なのか。さらに疑問が深まつたが、まあそんなことはやつぱりどうでもいい!」

「本当にどんな世界にでも転生できるのですか?」

『もちろんじゅ。美少女だらけのハーレムで魔法な世界から、核戦争後の荒廃したアメリカンな世界まで、何から何までじんと来いじや!』

『ほれほれ、どんな世界でもいいから転生先を希望するがいい。今すじいな神様、さすが神様!』

『ほれほれ、どんな世界でもいいから転生先を希望するがいい。今

ならお主の望む能力も付与してやつてもいいぞ』

なんと能力まで……ここまで来ると、逆に頭が冷静になるというのだ。俺は落ち着いて転生先の世界と、そして神様にお願いする能力を考えてみることにした。

じつくつと考えて結論を出した俺は、神様に確認をとるために声を出した。

「神様、転生先の世界はゲームの世界でも大丈夫ですか？」

『全然問題ないぞ。さあ、遠慮なく申すが良い』

「では、メタルサーバーが というゲームの世界に転生させてください」

『ふむ……どうこうゲームなのか、ちと教えてくれんかのう。こちらで調べてもいいが、万が一別の作品と間違えたら、田も当てられんからの』

「わかりました、では今からお話ししますね」

俺は早速、メタルサーバーの世界観と概要を話し始めた

さまざまな技術が発達し、人類の栄華が極められた近未来。人類は環境問題に悩まされながらも、満ち足りた繁栄を送っていた。ところが、盛者必衰という仏教用語に示される通り、世の中には永遠に絶対にといった言葉は通用しないのだ。

人類はその叡智を結集して環境問題を解決して地球を救うべく、ノア という名を持つ巨大電子頭脳を完成させた。しかし皮肉なことに ノア の出した地球を救う方法とは、全ての環境破壊の原因である人類を抹殺するという、とんでもないものだった。

ノア はその与えられた知能と権限をフル活用して、人類に牙を剥いた。ありとあらゆる電子機器は狂い、軍隊は彼らの盾となり矛となるはずであった自律兵器に虐殺され、拳銃の果てには核ミサイルや生物兵器が放たれる始末。

結局、文明に依存しきっていた人類が ノア の生み出した兵器やモンスターに敵うはずもなく、ここに人類の栄華はもろくも崩れ去つた。後世で言つところの 大破壊 の真実とはこういうことだつた。

しかし、人類もまたしぶとかつた。僅かながらも世界中で生き残つた人類は、 大破壊 の記憶を薄れさせながらも ノア の脅威と戦い続けた。 ノア の生み出したモンスターと幾度も死闘を交えながら、人類は村や町といった生存拠点を築いて団結し、生き延び続けた。

ひとまずの余裕を得た人々の中には、 ノア により押しつけられた運命に逆らうが如く、モンスターとの戦闘を生業とする職業を生み出した。 大破壊 前の主力陸戦兵器である戦車に乗り込み、その強力な火力を持つとして、地上を闊歩し空を支配するモンスター一どもをなぎ倒す、情け容赦無い賞金稼ぎ。さらなる高性能な武器や戦車を求め、モンスターの跋扈する廃墟をさすらう冒険家。

人々は彼らを意見の念を込めてこう呼んだ ハンター、と。

大破壊 という災禍をもたらした ノア 自体は、とある凄腕のハンターによつて破壊されたが、かといってそれで全世界のモンスターが消えたわけではなかつた。 大破壊 の傷跡は未だに癒えることはなく、世界にさまざまな悲劇と恐怖を量産し続けていた

「主人公はそんな荒廃した世界の象徴であるハンターとなり、モンスターと闘いながら旅をしていく、というゲームです」

そこで俺は メタルサーバー の説明を終えた。

『こちらでも調べてみたが、確かにお主の説明通りの、これはなかなかにシリアスな世界だのう。本当にこのゲームの世界でよいのか?』

神様が一体どうやって一瞬で メタルサーバー の内容を確認したのかは不明だが、まあだからこそその神様なのだろう、と無理やり納得することにしてから、俺は答えた。

「はい、問題無しです。それでその世界で生きるためにも、いくつかの能力をお願いしたいです」

俺はかなり欲張り、とんでもない能力をいくつも要求したが、神様はそれを聞いてもさして考えた様子も無くすぐに返事をくれた。

『よいだろう、この程度の能力は神にとつては造作の無いこと。せつかくのキャンペーン当選者じや、出血大サービスをしてやるつぞ』

「ありがとアリゼーさん、神様！」

正直無茶苦茶な能力ばかりだったので、却下されてしまつたら別の平和な世界に変えようかと思っていたのだが、あつせいと許可が出てしまい、俺は神様に平身低頭して感謝の言葉を述べた。

これで一度目の人生を浪漫溢れるあの世界で、たっぷりと堪能することができる。それに能力を頼むついでに、ゲーム通りでは面白くないから、新たな舞台も用意して貰つた。まさに至れり尽くせりだ！

『よし、早速だがお主を転生させてやる。転生させる途中で希望した能力は全て付与をねらへんから』

「よろしくお願ひします、神様！」

俺が元気よくそう答えたのと同時に、周囲がまばゆい光に包まれ、直後に軽い浮遊感を感じた ホワイトアウト。

## プロローグ（後書き）

つい勢いで書いてしまった作品で、不定期更新になるとは思いますが、これからいつひとつ書いていくつもりなのでよろしくお願いします。

それでは、御意見や御感想をお待ちしています。

## 第一話・転生

「うわっ！田が見えない！？」

意識を取り戻して早々、俺は軽いパニック状態に陥っていた。なしろ視界がぐんにやりと歪んでしまっていて、まともに周囲を見ることができないのだ。

「……ってあれ？」

パニックを起こして手を振り回していたら眼鏡に当たってしまい、眼鏡が落ちると同時に視力が回復したので、俺は呆けた声を出してしまった。俺の裸眼の視力はひどいもので、眼鏡をかけていないと日常生活に大いに支障を来たすレベルのはずだったのだが。

「あ、そうだそうだ。確かに神様にお願いした能力のひとつに、身体能力を最強にして欲しいというのがあったなあ」

なんだ、自分で頼んだ能力なのに忘れた挙句、そのせいでパニックを起こすとは……いきなり縛りの無い始まりで、早速俺は不安になってしまった。そもそもちゃんと転生できたのだろうか。

「ええと……おお、すごにな！」

眼鏡をかける必要のない人間が眼鏡をかけていたのだから、それは視界があんな悲惨なことになるわけで、俺は回復した視力で周囲を見渡した結果、感嘆の声をあげた。どうやら転生は成功したらしい。

先程までいた白一色の世界とは違い、今度は一面砂の世界だった。つまり砂漠だ。俺が望んだ メタルサーバー の世界はこんな感じがデフォルトのはずなので、転生は成功したのだろうとにらんだわけだ。

「しつかしすゞいなあ、あの神様は。確かに身体能力最強にしてくれとは言つたが、視力だけでこんなによくなるとは」

俺の目はまるで高性能双眼鏡のようになつており、意識を集中すれば何キロ先も見渡せるのだ。とはいえ、なにしろ周囲一帯は砂漠なので、現状では大した意味はなかつたが。遙か遠く先の砂丘を細部まで観察することができても、何の意味も無い。

「おまけにここは砂漠で、お空にはさんさんと照りつける太陽もあるのに、そこまで暑さを感じないぞ」

その通りだつた。せいぜい暖かいよりも上といつたぐらいしか感じない。砂漠でこの程度の暑さしか感じるのは、やはり身体能力強化が影響しているのだろう。ずいぶんと便利な体になつたものだ。きつと体力とか筋力とか、その他諸々もすごいことになつてているに違ひないので、いろいろと試してみなければならないだろう。それに俺、確かあの時は調子に乗つていて、毒や病気が一切効かず不死ではないが不老にして欲しいとか、そういうことも付け加えていたよつな気がする。

「うん？」

足元から軽快なメロディーが鳴り響いたことで、ようやく俺は足元に落ちている物体に気づいた。緑をメインに暗褐色の迷彩が施さ

れた、俺の愛用のポーチだつた。

「はて、あんな音を出す物を俺は持つていたかな……お、これは」  
音の正体を確かめるべく拾い上げたポーチの中身をチェックして  
いたら、電子辞書より僅かに大きいぐらいの携帯情報端末を発見し  
た。緑色に塗装されたそいつに、俺は見覚えがあつた。

「BUSHMINTローラーか。これはハンターの必需品だからな」

BUSHMINTローラーとは、ハンターの活動を手助けする携帯情報  
端末だ。今までに踏破したことのある地形がオートマッピングされ  
る地図機能をはじめとして、各種アイテムや戦車の管理機能、モン  
スターの詳細なデータバンク、電子メール、果てはダウンロードし  
た音楽やゲームまで楽しめるといつ、高性能多機能な携帯情報端末  
となつてゐる。

「新着メールが一件……さつきのはこれの着信音だったのか」

トップに表示されていたので、すぐにそれを選択して、メールの  
中身を読んでみた。

「あ、神様からか」

内容は要約すると、無事に転生せたからあとは自由にするよう  
のこととで、とりあえず今いる場所から南へ進むようこういう助  
言だった。読み終えると同時に勝手に消えてしまつたが、ちゃんと  
記憶したので問題ない。

BUSHMINTローラーのマップを確認してみると、マップ画面のま

とんどは真っ黒のままで、右端の下の今いる場所のみが明らかになつてゐる。八方位で言えば南東にいるわけだ。ここから南へ進むといつ」とは、画面から見て左へ直進すればいいんだな。

「よし、出発するか……つてその前に、さすがにこの装備じやまざいよな」

なにしろ今の自分は、トラックに跳ね飛ばされる直前の姿だ。普通の私服だし、大した物も持つていない。これではさすがにモンスターの出現するこの世界では、いかにもまずいだろ？

「さてさて、いい機会だからあの能力を試してみるか」

そうつぶやいた後、この世界で生きていくために必要な装備を身に付けた自分の姿をイメージして、それが実体化するように念じる……妙な白い光に包まれたりはしなかった。

「何にも前兆が無いと、一瞬成功したのか不安になるけど、どうやら成功したらしいな」

ニヤリと笑いながら、一瞬で特殊部隊員そのものの装備に包まれた体を見る。

砂漠迷彩の戦闘服にデザートブーツと、肘や膝を守るパッド。さらに戦闘服の上から拳銃やアサルトライフルの弾丸程度なら完全にストップできる防弾ベストを身につけている。ヘルメットは視界が狭まるのを嫌つて装備しなかつたが、どの道あの能力がちゃんと付与されているならば、たとえヘッドショットを喰らつても大丈夫のはずだ。防弾ベストは氣休めというかお守りというか、まあそんな感じの気分で装備した。それにこの世界で生きている他の人間に見

られたとき、防弾ベストも着ていなかつたら正氣を疑われるかもしれないでの、その対策という意味合いもある。

「いやはや、これもまたチートな能力だよな。日用品から食料はもちひりと、兵器すらもイメージさえすればなんでも実体化できるって」  
あの時は気分が高揚していたからなあ……。さつきから独り」とばかりでこなとかうんざりしてきたが、口に出すこと理解が深まるらしいので、まあいいだろ。」

「とりあえず、次はやつぱり武器だな。まずはサイドアームから出してみるか」

俺は常々使いたいと思つていていた自動拳銃を頭の中でイメージするとい、それを実体化させた。すると俺の右手に一瞬で濃い黒で仕上げられた自動拳銃が握られた。

俺がサイドアームとして実体化させたのは、シグザウアーパー228。世界中の治安維持組織で採用された傑作自動拳銃である、P226の小型短縮化モデルだ。小さくなつて扱いやすくなつたにも関わらず、九ミリパラベラム弾を一三発も弾倉に込められる。

ついでに俺が実体化させたP228には、銃本体上部にダットサイト、銃身下部にはフラッシュユーライトが取りつけてあり、サプレッサー装着用のネジが切られていた。ダットサイトとは、覗くと赤い点が見え、それと標的を重ねて撃つと命中するという照準器具の一種だ。無い場合よりも素早く的確な照準が可能になる。フラッシュユーライトは銃に取り付けて使う強力なライトのこと。サプレッサーは銃声を抑制するアクセサリーで、サイレンサーと呼んだ方が一般的だろうか。使う機会があればサプレッサーは実体化させるつもりだ。

「無事に実体化できたみたいだが、ここはちゃんと作動するかどうか、射撃練習も兼ねて撃つてみるか」

俺は目の前に射撃練習用の円が描かれた木製の標的を実体化させると、まずは一〇メートルほど後ろに下がつてから撃つことにした。

P228の弾倉を抜いて、ちゃんと弾丸が詰まっているかどうか確認した後、また弾倉をセットする。続いて銃の上部、つまりスライドを掴んで後ろに引いて、初弾を発射前の弾丸の待機場所である薬室に送り込んだ。安全装置も解除したので、これでいつでも射撃可能になつたはずだ。

ちなみに俺が妙に手慣れているのは、実銃を撃つたのはこれが初めてではないからだ。わざわざグアムにまで観光も兼ねて行き、この射撃場で何種類かの銃を撃つた経験がある。俺が今まで一度も実銃に触れて撃つたことが無ければ、いくら知識としては知つても、もつと苦戦したに違いない。

それはともかく、俺は両手でしつかりと銃を保持して、引き金に指をかけた。ダットサイトの赤い点を標的の中心に照準する。視力が強化されているおかげで、バッヂリと照準は決まった。狙いが定まつたので、俺は滑らかに引き金を絞つた。

乾いた銃声が鳴り響いて、スライドが勢いよく後ろに下がつて金色の空薬莢を弾き出すと、今度は元に戻る際に次弾を弾倉から薬室に装填する。反動は驚くほど軽い。というよりも、グアムで撃つたときとは大違いだ。どうやら身体能力強化が、ここでも影響しているらしい。

「初弾命中！」

俺が放った初弾は、見事に円の中心を撃ち抜いていた。続けて今度は連續で引き金を絞って、弾倉が空になるまで速射したが、結果は全弾が初弾と同じ場所に命中。

「あの神様、ひょっとして身体能力に射撃の腕前とかも含めてたのかな」

空になつた弾倉を捨て、P228を再装填した後、さりに一〇メートル下がつて片手で連射しても結果は変わらなかつた。

結局、五〇メートルの距離からでも結果は変わらなかつたので、俺は大満足した。拳銃でここまで当たられるのは異常だが、やはり神様が文字通り最強してくれたのだろう。ひょっとしたら、格闘方面も強化してくれているかもしね。

「今度はメインアームも試してみるか！」

調子に乗つた俺は、まず新たに実体化させて右太腿に装着したレッグホルスターにP228を収納すると、今度はメインアームのアサルトライフルを実体化させることにした。

次に実体化させたのは、日本の自衛隊が採用している89式小銃だ。小口径高速ライフル弾である五・五六ミリ弾を、三〇発まで弾倉に込められる。この89式小銃には、俺がダットサイトとフォアグリップ、さらにスリングを装着させている。フォアグリップは、アサルトライフルの前部に装着する追加のグリップで、より安定した射撃を可能にするアクセサリーだ。スリングは要するに銃を背負うための専用の紐のこと。

最初は米軍のM4カービンにでもしようかと思ったが、自衛隊が使っている89式小銃の方が、日本人である俺に合つかもしれないと思つたので変更にした。華奢な国産製品がこの砂漠でちゃんと作動するか不安だったが、自衛隊のイラク派遣でも問題無く使えていたようなので、思い切つたのだ。まあ、別にいくらでも実体化できるのだから、これから機会はいくらでもあるだろ。

先程と同じく標的を用意すると、まず100メートルからセミオートで撃つた。セミオートは半自動、要するに拳銃と同じく引き金を引く度に一発ずつ発射される形式のことで、面白いように標的の中心を五・五六ミリ弾が撃ち抜いていった。なので今度は三點バースト、一度引き金を引くと三発ずつ発射される形式でも撃つてみたが、相変わらずの全弾命中。

「本当に神様はチートだなあ」

思い切つて300メートルから走り回りながらフルオート、つまり機関銃のように引き金を引いている間は弾切れまで撃ち続ける形式で撃ちまくつたが、やっぱり全弾命中してしまったので俺はビックリだ。

付け加えるなら、高性能だがクソ重い防弾ベストと銃器を身につけているのに、まったく疲れず汗も大してかかずに高速で走りまわしたことにも驚愕した。やはり俺は人間ではないレベルにまで身体能力が強化されてしまったのだろう。でもまあ、この世界ではこれぐらい無いと、長生きできないよな。

射撃練習はここでお終いにして、俺は89式小銃を背負う前に、大量のマガジンパウチが設けられたタクティカルベストを実体化さ

せて、防弾ベストの上から着込んだ。マガジンハウチには89式小銃とP228の予備弾倉を詰め込んでおく。さらに腰回りにも予備のマガジンハウチを実体化させて装備した。

「そろそろ出発しようかな」

スポーツドリンクの詰まった軍用水筒を実体化させ、その中身を飲んで一息ついた俺は、いい加減に出発しようかと思い始めた。装備も整えて射撃練習もしたことだし、あとは神様の助言に従って南へ進もう。

「でもなあ、いくら身体能力強化されてると言つても、ここを延々と歩くのは嫌だよな……主に気分の問題で」

見渡す限りの砂漠を見ていると、げつそりとしてしまうが、俺はポーチを拾うと歩き出そうとした。が、うっかりポーチのチャックを閉めていなかつたせいで、中に入っていたビニール袋に包まれた物が落ちてしまった。

「チツ……そうだ、乗物を実体化させればいいじゃん!」

自分の失態に舌打ちしながらビニール袋を拾い上げた俺だが、その中に入っていた転生前に俺が購入し、ある意味でこうなる原因となつた陸軍兵器図鑑を見て、思わず叫んでしまった。

「そつと決まれば早速、何を出すか決めなくては」

陸軍兵器図鑑を開いて、どんな車両を出そつか検討を開始する。

最初はいきなり強力な主力戦車を出そつたが、この世界で

は本物の戦車を手に入れるのは難しいというのが常識だったことを思い出し、グレードダウンすることにした。まだハンターとして登録もしていないのに、いきなり主力戦車に乗つて現れたら、余計なトラブルを招きそだからな。ただあまり弱いのにすると、それはそれで困るから、悩みどころだ。

少し考えた後、俺は装輪装甲車、要するにタイヤで走る装甲車にすることにした。さらに装輪装甲車の中でも、それなりに強力な火砲を搭載したモデルを検索条件に設定。その結果として、俺はある装輪装甲車を選び抜いた。

**ルーアイカット** 南アフリカで偵察や火力支援を主たる任務として開発された装輪装甲車。南アフリカの広大なサバンナを高機動で走破すべく、八輪のコンバットタイヤと地雷防御が備えられ、タイヤのひとつやふたつ吹き飛ばされても自力走行可能というタフネス。当初は高初速で長砲身の六一口径七六ミリ戦車砲を搭載していたが、その後はより強力な一〇五ミリ砲に換装された改良モデルが出ている。戦車並みの射撃管制装置を搭載し、砲塔側面に四連装煙幕弾発射器を備えていて、さらに副武装として七・六一ミリ機関銃を二丁備えている。

実は同じ種類のイタリアのチエンタウロ戦闘偵察車どちらにしようか迷ったのだが、緑豊かで幹線道路の整備されたイタリアではなく、道なき道を進むこの世界では過酷な南アフリカのサバンナを高速で走り回るルーアイカットの方が適任だと判断し、ルーアイカットに決めたという経緯がある。

俺が目の前に実体化させたルーアイカットは、一〇五ミリ砲搭載の改良モデルだ。それを俺がさらにあれこれこの世界に合わせて改良してしまっている。

「うーん……プレイしているときはあまり意識しなかつたが、思ったよりすげになこの世界の技術は」

ほぼ駆逐戦車のようなルーアイカットだが、あくまで装甲車なので、まともに戦車クラスの火砲と撃ちあつたらひとまつもない。というわけで、俺はまず最大の弱点である装甲の強化を図った。エンジンをより強力なものに換装し、装甲タイルを可能な限り貼りつけた。装甲タイトルとは要するに増加装甲で、ゲーム中では戦車の基本的なHPの役割を担っていたが、リアルなこの世界でもその役割は果たしてくれるだろう。かなり貼りつけたので、多少の銃砲撃はものともしないはずだ。

続いてゲーム中ではCヨニットと呼ばれている、戦車の頭脳であるコンピュータも各種センターとともに強化した。具体的な大きい変化は、音声での命令を可能にして、俺は大まかな指示を出すだけでよいことにした。さらにCヨニットが強化されたおかげで、副武装の七・六二ミリ機関銃がセンサーと連動して動くりモコン式になつた。

その他の細かい点も改修を施したので、モンスターが跋扈するこの世界でも十分に通用する車両になつたはずだ。

「どれどれ、乗り心地はどうかな」

俺は喜び勇んで自前の装甲車に乗り込んだが、車内はちゃっかりとクーラーが効いており、本来なら四人乗りが俺だけなので十分なスペースが確保されていて、快適なことこの上なかつた。

「これで準備万端だな」

俺はルーアイカットの車長席にねじまつり、にんまりとした。

「ルーアイカット、南へ前進！」

簡潔な音声命令を伝えると、了解を伝えるグリーンのランプが点灯し、ルーアイカットが一際エンジン音を高鳴らせるハブ駆動で力強い進撃を始めた。

俺の旅はこれからだ 邪しいエンジン音と胸の高鳴りがシンク口する中、俺は旅のはじまりを実感したのだった。

## 第一話・転生（後書き）

今回は準備だけで終わってしまったが、次回ははじめて徹平が街へ入り、ハンター登録したりする予定です。

ちなみに原作のキャラや街は基本的には出ず、こちらではアイテムやモンスターの設定といったものだけを利用するつもりです。

それでは、御意見や御感想をお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1883o/>

とある軍オタの鋼鉄戦記

2010年10月8日12時46分発行